



発行所

一般社団法人 全日本木材市場連盟
編集・発行人 中山義治
東京 都文区 林友ビル6階
電話 03(3818)2906
FAX 03(3818)2907
毎月1回1日発行
定価 年3,000円
(会員は会費に含まれています。)

第59回定期総会を開催

需要変化に柔軟に対応する流通体制づくりを！

当連盟は5月19日(月)、第59回定期総会を江東区(東京)のホテルイースト21で開催した。出席者は、会員84名(委任状39名を含む)。来賓として林野庁宮原章人次長、木材産業課の飛山龍一課長、業務課の小山富実男課長、全木連の吉条良明会長、日本木材総合情報センターの伊藤威彦理事長、農林漁業信用基金の津元頼光副理事長ほか多くの方々にご出席頂いた。



開会挨拶をする市川会長

大会では、全市連会長賞の贈呈のほか25年度の事業報告、同決算が決議された。また任期満了となる理事・監事を選任し、大会宣言を採択した。

【開会宣言・開会の挨拶】

花尻副会長(近畿支部長)は黙祷の後、「木材の循環利用を通じ、美しい森林と木の文化を次世代に継承するため、この総会を契機に、木材市場は一步先の取り組みを行い、明日の展望を切り開いて行きたい」と開会宣言した。

市川会長は開会挨拶で、国産材の需給について、「今後増加する並材の利用拡大のためには、コスト削減をしながら、価格・質・量の安定供給を行うことが不可欠である。25年度は、役員会で木材需給の情報交換や流通コスト削減の方策について意見交換したほか、原木市場の経営動向の調査、原木不足に関する緊急調査など、需給変化を踏まえた木材流通の実現に向け検討した」と述べた。また今年度の取り組みについて「林野庁予算により、全国8地域で原木の広域流通構想づくりや研修が行われる。この中で商社の取引手法等を勉強し、並材の取引に生かすことができなにか検討を進め、その成果を木材市場の業務に役立つようにしたい」と述べた。

【来賓祝辞】

林野庁の宮原次長は、木材産業を成長産業として発展させるための施策展開について、「国産材の利用促進には、新たな加工技術や需要開拓が重要である。最近、燃えにくい構造材や高層建築に利用可能なCLTの製造技術が開発されている。日本では、建築基準の制約などにより普及が限られているが、欧州では高層建築にも木材利用が進んでおり、日本でも普及するよう建築基準づくりへの協力に力をいれる」と語り理解を求めた。また需要者のニーズに的確に対応するため、「山側の施業の集約化による規模拡大を図りつつ、木材を大量安定かつ低コストで川下へ提供することが重要であり、路網の整備や新しい生産技術の導入などを進めるとともに、原木供給側の民有林と国有林が連携して、安定的に供給する体制づくりを進める」として、業界の協力を要請した。

また全木連の吉条会長は、「戦後まもない頃、森林の過伐傾向が問題となり、『木材資源利用合理化法』が制定され、木を伐ることは環境に良くないとされた時代があった。当時の木材需要と供給量との関係からは、やむをえなかつたと思う。いま当時からの拡大造林が実を結び、木材利用の時代を迎えている。地球環境保全のためには、石化資源の使用を抑制し木材を進めることが大切だ」と語り、「こうした観点から、貴団体が流通業の立場で、木材利用促進に取り組んでいることに敬意を表したい。今後ますますの活躍と発展を期待したい」と述べた。

【議事】

議事は、中国支部長の山下薫氏(真庭木材市売株式会社)を議長にして進行した。

第1号議案 25年度事業報告及び決算承認の件
平成25年度は、関係団体と緊密に連携しながら、木の良さのPRや木材利用推進のための人材育成、木造住宅や公共施設への木材利用拡大に取り組みとともに、木材流通の活性化、市場機能の強化等の取り組みを行った。

25年度決算は、経常収益計2936万円、経常費用計2560万8千円となり、当期正味財産387万6千円が増となった。また公益目的支出計画は、ほぼ計画どおりの実施となった。内閣府へは、その旨を報告する。

定款第22条の規定に基づき、萩原宏監事より、決算等の内容は適正であるとの監査報告を頂き承認された。

第2号議案 平成25年度事業計画及び収支予算の報告の件
一般社団法人化に伴い、事業計画及び収支予算は、理事会の決定事項となり、3月の理事会で決議済みである。大会宣言に、そうした内容を盛り込んだ旨を報告し、承認された。

第3号議案 理事及び監事の選任の件
本総会で理事及び監事の任期が満了になる。各支部の報告をもとに作成した候補者名簿を提案し、承認された。

また正副会長、支部長、専務理事については、定款20条2項で、理事会の決議により理事の中から選任するとされている。総会を中断し、公開理事会に切り替

え、役員選考委員会の結果を理事会に報告し、承認された。
第4号議案 その他
次期総会の開催地は東京とすることを提案し、承認された。

【大会決議】

奥羽支部長の工藤茂丸氏（秋田中央木材市場社長）より、需要変化に柔軟に対応できる安定供給体制づくりに取り組み、などを内容とする大会宣言案を提案し、満場一致で採択された。

【閉会の言葉】

西垣泰幸副会長（東海支部長）が、「記念講演会で、東泉清寿社長と鈴木和雄社長より、両社の取り組みをお話し頂く。本日の総会の締めにあわせて内容だと思うので、ご参加をお願いしたい」と語り、総会を終えた。

市川会長の挨拶（要旨）

会員並びに多くの来賓におかれては、ご多忙の中、ご出席頂き、厚くお礼申し上げます。

わが国の経済は、政府の大胆な経済対策等によりデフレ緩和が進み、緩やかな景気回復が続いている。平成25年の新設住宅着工数、木造住宅着工数はともに前年比1割増の伸びを示し、4月の日銀短観で、木材・木製品の業況指数は、久しぶりの高水準を記録した。

一方、急増する国産材の引き合いに対し、原木や製品の供給が追いつかず、需給がひっ迫する場面があった。今後増加する人工林資源、とりわけ並材の利用拡大のためには、コスト節減しながら、価

格・質・量の安定の供給が不可欠である。全市連は、昨年8月の役員会で、各地の木材需給について情報交換を行うとともに、会員市場等の連携による大口取引の推進などにつき意見交換を行った。また10月には、全国の代表的な生産加工拠点における原木市場の経営動向や需要者の意向把握、木材市場の取扱量の調査を実施したほか、12月には原木不足の実態を緊急調査するなど、需給変化を踏まえた木材流通の推進に向け取り組んできた。

今年度は、林野庁予算により、全国8地域で原木の広域流通構想づくりや必要な研修を行う予定。輸送費の節減により、効率よく取引する手法を勉強し、並材の取引に生かす検討を進め、その成果を木材市場の業務に役立つようにしたい。さて4月の消費税増税の影響はほぼ想定どおりだが、施策の効果や業界の努力によって一刻も早く需要が回復し、林業、木材産業の成長産業化が進むことを強く期待する。

木材利用ポイントなどの各種支援策や、林業を題材とした映画の公開により、森林や木材に対する国民の関心が高まっている。今こそ環境・健康に優れ、耐震性の高い木造建築の建設促進、リフォーム需要の掘り起こしなどに積極的に取り組むことが大切だ。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を契機に、「木の文化」をPRし、競技施設はもちろんだ、道路、歩道など街づくりへの木材利用拡大に取り組むことも大切。

平成26年度は、以上のほか東日本大震災の風評対策などへの協力、合法木材やJAS製材品の供給体制づくり、人材養成

成などに取り組むこととし、3月の理事会で、平成26年度事業計画案等を決定した。

全市連は、これらの諸課題の実現に向け、全力を挙げるので、関係各位には引き続きのご理解、ご支援をお願い申し上げます。

本日の総会は、25年度の事業報告、決算のご審議を頂く。十分な審議をお願いしたい。また本日、全市連功労賞を受賞される皆様にご心よりお祝いを申し上げますとともに、ご参会の皆様のごさらなる活躍をお祈り申し上げ、開会のご挨拶と致したい。

大会宣言

私たち全市連会員は、本日ここに第59回定期総会・東京大会を開催した。

国産材資源の充実が進み、その利用拡大が重要課題となる一方で、国産材価格の急落と急騰が短期間の内に起こり、昨年暮れには需要が急増して、ヒノキ材原木が供給不足になる等の事態が生じた。

これらの根底には、日本林業特有の構造的要因や昨今の労働者不足があり、これを木材市場の力だけで解決することは難しい。しかしながら、国産材の利用拡大には、需要者の信頼確保が重要であることは論を待たない。

木材市場は、国産材流通に大きな役割を果たしており、全市連会員としてこれまでの経験と実績を活かして、需要変化に柔軟に対応できる安定供給体制づくりに取り組む必要がある。

今年度は林野庁予算により、原木の広域流通拡大のため、国産材原木の供給構

想づくりに取り組むが、並材にふさわしい取引方法の工夫などを行い、これらの安定供給体制づくりに努める。

こうした認識のもと、全市連は政府に対し一層の生産流通加工対策や木材利用拡大対策、消費回復策を強く要請するとともに、自らの事項に取り組む。

一、木材市場の商流機能の充実強化を通じて、国産材並材や木質バイオマスの広域流通体制づくりに取り組もう。

一、東日本大震災からの復興支援に向け、風評被害対策や地域材の利用拡大に取り組もう。

一、木材利用ポイント事業の有効活用と、公共建築物等の建設に必要な合法証明木材の供給体制づくりに取り組もう。

一、JAS製材品等のPR、円滑な供給体制づくりに取り組もう。

一、木の良さを広める人材養成に取り組もう。

以上、宣言する。
平成26年5月19日
一般社団法人全日本木材市場連盟
定期総会・東京大会

【正副会長・支部長・常勤役員】

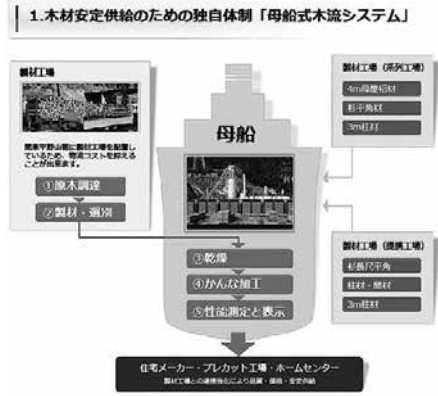
- 【会長・関東支部長】市川英治、【副会長・関東支部長】齋藤公男、【副会長・東海支部長】西垣泰幸、【副会長・近畿支部長】花尻忠夫、【副会長・四国支部長】樋口高良、【副会長・九州支部長】佐藤耕三、【東北支部長】庄子富雄、【奥羽支部長】工藤茂丸、【北陸支部長】中島一雄、【中国支部長】山下薫、【専務理事】小合信也（新理事・監事名簿は次号に掲載）

【記念講演会1】

国産材製材と今後の山林活用について

(株)トーセン 東泉 清寿 社長
当社の取り組みをご紹介しながら、これからの日本の林業をどうすればいいか。私なりの考えを紹介したい。

これからは製材事業とバイオマス利用の組み合わせが大事であり、そのためエネルギー事業部をつくった。いまのところ売上ゼロだが、この夏から発電所が稼働して収益が上がり始めることを期待している。



会社は、昭和39年創業で、小さな町工場から直営18工場、提携8工場、合計30万㎡の木材を使う工場に成長した。「ロマンを共有」することで、有能な人材が集まってくる。矢板周辺にスギ、ヒノキ資源がある。木材業は、物流にコストがかかるので、それを少なくする戦略が大事だ。資源のある山に近いところに、キャッチャーボートの役目をする小規模の工場を配置し、そこで加工した製品を母船に持ち込み、乾燥、かん加工、性能表示をする。母船はダムの役割もして

おり、国産材の安定供給に大切となる在庫機能を果たす。小さな製材工場で2億円の資金がかかるが、毎年500社が廃業している。そうした工場の中から、条件にあうものを再生させて活用している。

コスト競争に勝つには、製材とバイオマス利用を併用し、森林資源をフル活用しコストを下げるのが大切だが、それには川上と需要者の間にある「不安定要因」がネックであり、その解消には、山への還元が不可欠となる。

最終的にはバイオマスタウン構想である。「木質バイオマス燃料、木造建築」に力を入れる那珂川町役場を起点に、木質バイオマス発電施設、製材工場を見学し、地元の商店で昼食し、バイオマス燃料で発生した熱を使い、養殖したうなぎや温室栽培したマンゴーを買ってもらい、地元にお金を落としてもらおう。50km圏内で行うことにより、余計な運賃をかけるない工夫が大事である。

製材に利用すべき材料は製材品にし、製材に不適なもので発電するなどの総合的な取り組みで、日本林業の競争力を高めることが大事だと考えている。木材資源の循環利用と総合利用を通じて、日本の山が良くなるようにしたい。住宅着工だけでも、これからはそれほど伸びない。製材だけでも、バイオマスだけでも駄目だと思う。方向転換が大切だ。

【質疑】
問 バイオマス発電では、燃料の乾燥が大切だが、どうするのか。
答 そのとおりであり、含水率が問題だ。遠くまで運ぶと、運賃と敷地がかかるの



で、近いところで含水率を下げる研究をしている。
問 焼却灰の利用、冷却水の利用、未利用木材とそれ以外の割合をどうするか。
答 未利用材と一般木材の比率を含めて、ケースバイケースで考えるしかない。

【記念講演会2】

中間土場活用による原木流通戦略について

(株)東海木材相互市場 鈴木和雄 社長
紙面の制約により、次号で紹介する。

木材アドバイザー養成講習会で学んだ事

大谷 恵理
関東一円の大雪が予想されていたのに、2月7日(金)の朝、新木場の駅から木材合板博物館のある建物へと歩を進めながら、私はこの2日間であんなにだけ、事を学べるのだらう、どんな人達に出合えるだろうとワクワクしていました。

会場に着いて受付を済ませ、席について周囲を見渡すと、男性ばかりで自分以外に女性の姿が見えないことに驚きました。聞けば他に2名、女性の申込があっ

たものの、最近の木材市場の活況で業務に追われ受講を断念したとのこと。消費増税前の駆け込み需要で、木材の不足や価格の高騰が起きているのは知っていたが、働く人達にこうした影響があることを実際に見聞きしたのは初めてでした。

林野庁や岡野先生の挨拶に続き、最初の講座は、早稲田大学の森川靖先生の「地球環境保全と森林・木材利用」です。
先生は、46億年前の地球の誕生から現時点までを俯瞰しながら、かつてイラン・イラクやサハラ砂漠が緑に覆われていたことや、森林が失われれば都市も滅びると、世界最古の叙事詩に謳われていることなどを熱く語られました。日本においては、昔から私たちの心象風景に必ず登場する松が、魏志倭人伝や日本書紀にはほとんど目立たないこと、人口の増えた6世紀ごろから、燃料などへの樹木の過剰消費で荒地となった場所に松が生え、それを利用してきたという、日本人の知恵が印象に残りました。

難しくてもこれだけは覚えなさいと言われた光合成の化学式。炭素と水と光エネルギーから、酸素と糖類を作り出す植物の能力を端的に表しています。人間や家畜を含めた地球上のあらゆる動物が、植物の生産物を利用しなければ生きられないのに、人間の活動は地球の生態系サービスの持続可能な上限を超えて、危機的な状況を引きかねないところまで拡大しようとしています。新聞や雑誌で見聞きした事柄ですが、あらためて木材を扱う、木材に関わるということの意味、責任の重さを深く考えさせられました。

そして途上国の森林再生プロジェクト

の困難さ。短期的に換金可能な作物と用材樹種の混植など、地域住民が継続して収入を得られる仕組みをどう構築するか、が鍵だということです。違法伐採の問題も決して過去のものではありません。大量の紙を使う私達には、森林とそこに棲む動植物、利用する住民を迫害する加害者になっていないか、きちんと調査し、怪しいものにはノーと言いう責任がある、と、強く感じました。

お昼をはさみ、東京都市大学の大橋好光先生の「木造建築・木造住宅を知る。木造建築・木造住宅を科学する。」を受講。木造軸組・ツーバイフォーなど4つの住宅構法の説明や、求められる木材の品質とそれを量る基準などについて学びました。ヤング係数や含水率という言葉は知っていても、実際の建築で、それが構造計算上必要な許容応力度の算定に関わってくる事を始めて知り、木材の最大の出口である住宅建築について、多くの知見を得られたのは幸いでした。

その後の講座では、アクシデントで林材ライター赤堀楠雄氏が来られず、パワーポイントの資料を使い全市連の中山氏が説明されました。私は赤堀氏と以前から面識があり、なかに幾つか良く知っている画像があったため、「東京おもちゃ美術館」[Soup Stock Tokyo] など新しい木材利用のあり方の紹介については補足説明をさせていただきました。

一日目の最後は建築環境ワークス協働組合理事、栗田紀之氏による「木材に対する建築側の期待」でした。腐る、反る、ばらつきといった欠点を持つ木材ですが、美観はもちろん、同じ強度で他の材

料と比較した場合の圧倒的な軽さ、生産に要するエネルギーの少なさなど多くの長所があります。公共建築物への国産材利用が進む中、羽柄材などにも品質基準が求められていくというお話でした。

2月8日(土)の朝、前日から続く大雪の中、講習会2日目の最初の講座は木材・合板博物館館長、岡野健先生(東大名誉教授)の「木の見分け方と基本的性質を学ぶ」でした。針葉樹と広葉樹の違い、広葉樹が針葉樹から進化したものだという基礎的な知識すら知らなかった私にとり、とても興味深く役立つ講座でした。木材の密度と収縮率は比例する、だから軽い桐は狂いが少なく、密閉性の高い箆笥を作れるのだという事に納得がきました。

引き続き岡野先生の指導で、ルーペを使って木の見分け方を実践、様々な樹種の木片をカッターで削り断面を観察しました。教わったとおり、広葉樹は道管の有無で識別ができます。その配列も樹種によって違いがありますが、特に街路樹として身近なケヤキは道管が一列に整然と並び、とても印象に残りました。

昼食休憩の時間、昨日来られなかった赤堀さんが、日本の素材生産の現場について、熱い思いを語られました。日本の林業地の多くは、限界集落と呼ばれる地域と重なります。地域のために林業再生が必要と言われる事がありますが、むしろ林業のために、人の住む集落が必要だという言葉には重いものがありました。柱材の生産を中心とした質を求める林業から、バイオマス利用を含めた量の林業

へ、そんな単純な図式で、日本の山を守れるのかとの問いかけは胸に響きました。今回は短い時間でしたが、他の多くの参加者も、もつと赤堀氏の話を聞きたいと思ったのではないのでしょうか。今後、受講者同志が集まる機会があれば、ぜひお招きしたいと思いました。

最後は、鹿児島大学の遠藤日雄先生による「日本の木材需給の動向と見通し」です。日本の林業・木材産業が、これから工業化という大きな波に晒されていくという予想。高性能林業機械を使った搬出、大規模な製材工場、合板メーカーの国産材シフト、構造成材材の需要拡大にバイオマス利用への期待と、流れは確実にその方向に向かっていくようです。それは避けえない事として変化に対応しながら、一方で、どうしたら山にお金が回るのか、木を育てる事への誇り、木を大切に扱う心、そういったかけがえのないものとの折り合いをどう付けていくのかについて、深く考え行動しなくてはと感じました。

その後に行われた試験は問題数も多く、配られた木片の樹種を観察して特徴を記述するなど、かなりレベルの高い内容でした。合格できるのか、一抹の不安を感じながら会場を後にした私ですが、可否に拘わらず、受講して本当に良かったと思えました。地球環境との関わりから、木材の基礎知識、林業と木材流通の現状、建築・住宅に関する素養まで、幅広い知識が求められる木材アドバイザー。もし合格する事ができたら、その資格を生かし、一般の方への啓発や木材利用拡大に、更に努力したいと思えます。

雑記帳

文芸春秋6月号で、大谷光真さんの「退任を前に」という短文を読んだ。そこには、「6月5日を持ちまして、私は浄土真宗本願寺派二十四代門主を退任いたします。父である前門主から法統を受け継いで三十七年…、

(中略) …、ちょうど良い時期であると判断いたしました。」という書き出しでご自身の想いが述べられていた。▽大谷門主をネットで検索すると、「親鸞聖人の孫、如信(によしん)上人が第二代をつがれて以来、聖人の子孫が本願寺をつがれ、現在の門主は第二十四代」とある。途轍もなく偉い方でこうしたネタにすることさえ畏れ多いことかも知れないと感じる。▽門主は就任後三年に、これから宗門が目指すべき方向について、「教書」を発表したが、その理由を「浄土真宗には…七百年を超える伝統があります。しかし、そこにあぐらをかき、自分の世界だけを守って満足することは、宗教が存在する本来の意味とはかけ離れてしまうのではないかと思っていたからです」と述べておられる。初心が大切ということ。▽さて今月末を持って全市連の常勤理事を退任させて頂きます。3期6年の間、会員の皆様には大変、お世話になりました。有難うございました。少しでもお役にたてばという積もりで参りましたが、たいしたことはできませんでした。国産材流通に大きな役割を果たす木材市場の存在感を高めつつ、今後の発展をどう図るか。会員各位のご活躍と発展をお祈り申し上げます。後任は小合信也氏です。どうぞ、よろしくお願い致します。(中山)